2021年08月31日 中日新聞 朝刊 12面

世界の壁実感「良い経験」

100㍍T64予選敗退 瀬戸出身・大島選手

陸上男子100㍍予選の1組5着で決勝進出を逃した大島選手＝国立競技場で

次の出場種目で雪辱誓う

TOKYO 2020 +1 パラリンピック

東京パラリンピックで、二十九日にあった陸上男子100㍍（義足T64）予選に臨んだ瀬戸市出身の大島健吾選手(三)＝名古屋学院大。11秒41の1組5着で決勝進出には届かなかったが、「体も今までで一番よく動き、楽しく走ることができた」と笑顔で振り返り、残る種目での雪辱を誓った。

パラ初出場で、100㍍が最初のレース。表情に硬さはなく、磨きをかけたスタートダッシュに成功し、序盤は抜け出した。しかし、中盤以降に伸びず、世界記録保持者ら格上の海外勢に次々と抜かれ、予選落ちした。

大島選手は生まれつき左足首から先がないものの、地元の瀬戸西高では日常用の義足をはいてラグビー部で活躍。大学入学後から本格的に陸上に取り組むと、100㍍で日本選手権優勝、11秒37のアジア新記録を打ち立てるなど成長著しく、日本のパラ陸上の期待を背負う存在となった。

今大会で残るは200㍍とメンバー候補となっているユニバーサルリレー。100㍍で世界トップクラスとの差も肌で感じ「良い経験が積めた」。大学の指導者や仲間、義肢装具士らへの感謝も述べ、「数え切れないくらい多くの人に支えられ、今ここに立てている。この結果を届けることには申し訳なく、悔しい。結果をしっかり受け止め、これから取り返していけたら」と意気込みを新たにしていた。（伊勢村優樹）

※この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています
許諾番号：20210922-26650

(c).中日新聞社 無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています